保存版 VOL. 20

町雑誌 千住

SENJI

特集■おばけ煙突

■千住がでてくる本　■なぎら健壱さんの千住

■TVフリークが振り返る千住 ON TV2005・2006

連載■千住タイムトラベル／行きつけの店

千住の思い出／ときどき散歩ドキドキ散歩

頒価300円

Machi Zasshi-Senju

目　次

特集 おばけ煙突 ―― 1

四本煙突の写真一枚あると 二時間は話が続くんだよね

煙突のあった頃　煙突のあった事　煙突のあった場所 ―― 2

お化け煙突みつけた ―― 5

つげ義春の描いたおばけ煙突 フィギュアになった煙突 希望の煙突 ― 6

はじまり・終焉・そして ―― 8

…そして今も ―― 10

千住がでてくる本

東京千住・深川物語／銘品探訪 東京の隠れ味、極み味、和み味／芭蕉と千住宿 ―― 11

なぎら健壱さんの千住 ―― 12

TVフリークが振り返る千住　廣瀬年実

ON TV 2005・2006 ―― 14

連載 千住タイムトラベル　11　石坂　満

あの頃の音、声、匂い　其の二 ―― 21

連載 行きつけの店　なかだえり

ワインバーVino-Flute【ヴィノ・フルート】 ―― 22

連載 千住の思い出　4　安藤義雄

髪結い ―― 25

連載 ときどき散歩、ドキドキ散歩　2　米津誠太郎

テンテケ、ツクツク ―― 26

お願いなど ―― 29

※千住のいえ（中）は次号掲載となります。

表紙イラスト　なかだえり
目次 写真　藤見　幸男

ようやくvol.20をお届けすることが出来ました。今回の取材は05～07年でのものとなっています。編集人の突然の入院と療養に加えて出稿直前の全データ消失などの事故が重なって、全てを編成し直す作業に、思いのほか時間がかかってしまいました。差し換えた記事もありますが、もともとニュース性よりも、まちの記録を主眼としていることもあり、時は経っても重要と思われるものは、そのまま掲載させていただいております。

今回、とても多くの方からご心配と励まし、助言をいただいたことに、この場からも改めて感謝申し上げます。

四本煙突の写真一枚あると二時間は話しが続くんだよね

今ではおばけ煙突と言うほうが解りやすいのかもしれないが、当時を知る人にとっては、確かに一枚の写真から、くだんの煙突の話題はもとより、それが引き水となって「そういえばあの頃は」と思い出話に花が咲く。煙突を知る誰もが、この姿を記憶のなかの背景としているのだ。

この印象的な言葉は、千住四丁目で写真スタジオ「するがや」を営む藤見啓二氏が、友人に煙突の写真をプレゼントした折に、喜んだ友人が口にしたという。現在東京電力所有で、絵はがきにもなったりと私達になじみの多い煙突写真の多くは、氏の叔父にあたる藤見幸男氏の撮影したもので、寿町で長く写真店を営み、惜しくも昨年亡くなられたとのこと。目次及び前頁の写真は幸男氏によるものをお借りした。

MEMO
東京電灯会社千住火力発電所
大正15年1月運転開始
昭和38年5月運転修了
イギリスとの技術提携による

外国製ボイラー	12缶	
発電機	3基	
煙突の高さ	83.82M	
煙突の内径	頂部4.57M	
	底部5.44M	
外径	頂部4.81M	
	底部6.40M	
煙突の材質	鋼板	

煙突のあった頃

その煙突のある東京電力火力発電所は、日本最大規模の建造物であった。浅草発電所を建て替える予定であったのが大正12年の関東大震災で都心が崩壊したため、燃料の石炭を東京湾から船で運ぶ為に、川べりで広い敷地をという条件に合ったのが千住四丁目堤外西耕地（現千住桜木1－12）であった。

極端にひし形に配列された四本の煙突の本数が角度によって変わって見えることや連日煙を出すわけではないことから「おばけ煙突」と愛称され人々に親しまれた。

千住の片隅で生まれ育った少女も、京成電車に乗れば必ず煙突の見える側に席をとり、車窓からゆっくりと本数が変わっていくのを眺めた口ではあるのだが、隅田川の遥か向こうに小さく見える工事中の東京タワーが少しづつ高くなっていく姿の方にわくわくした。現実目の前のものよりも、未来を感じさせる遠くにあるものということが想像心を満たしたのだろう。電化社会となって時代も大きく変わる頃であった。

けれども多く、人々は煙突の化けっぷりを楽しい謎としてしっかり受け止めている。経済成長の象徴であり、頼もしい千住のシンボルとして「おばけ煙突」を揚げ、懐かしがる。上野辺りからでも軽々見えたのだそうだ。どんなに遠出しても見渡せば必ず見える煙突を目指して家に帰ることができたなど各人それぞれに忘れられないエピソードを持っている。

煙突のあった事

本誌vol.6掲載の「映画や文学の舞台になった千住」特集にも、人々が戦後の日本を元気に生きて行く姿を描くなかで、煙突は『東京下町のシンボル』として、頻繁に登場している。

以前、池波正太郎の取材で千住を訪れた大和田獏さんとの会話でお化け煙突の話が出たら、映画『煙突の見える場所』に影響を受けて俳優を志したのだとのことで、感慨深そうに煙突のあった辺りの中空を、暫くの間見つめておられた。

地域の子供達から「おばけ煙突」に関する質問を受けることが多い。地域の歴史を家族に問うと、必ずと言ってよい程「おばけ煙突のあった町」という話になるとか。その両親は既に煙突が無くなってから生れた世代なのだが、それでも既に合い言葉のように伝えられている。

昭和39年にその役目を終えて姿を消したはずの煙突が、地元住民のみならず、その在りし日や場所を知らない者の心をも捉え、語り継がれているというところにまさに「おばけ」たる由縁を感じてしまう。そしてこの特集で、その理由が少しでも説明できたらと思う。

千住の川辺の変貌

奥に見える紅白に塗り分けされた東京電力の鉄塔が、煙突のそびえていた場所だとされる。桜木の都営住宅建て替えに伴って整備されたスーパー堤防沿いに眺めると、千住の変貌ぶりに改めて驚く。奥にカミソリ堤防とテラスが見えるが、煙突のあったころの堤防は現在二重になっている内側のもので、もっとずっと背が低い。子供達は堤防の上を綱渡りのように歩いて、親には内緒の肝自慢の場でもあった。

煙突のあった場所

東京電力足立支社に、煙突の写真は飾ってあるものの、現在では煙突を見た事のある人が皆無、というのは無理もない。

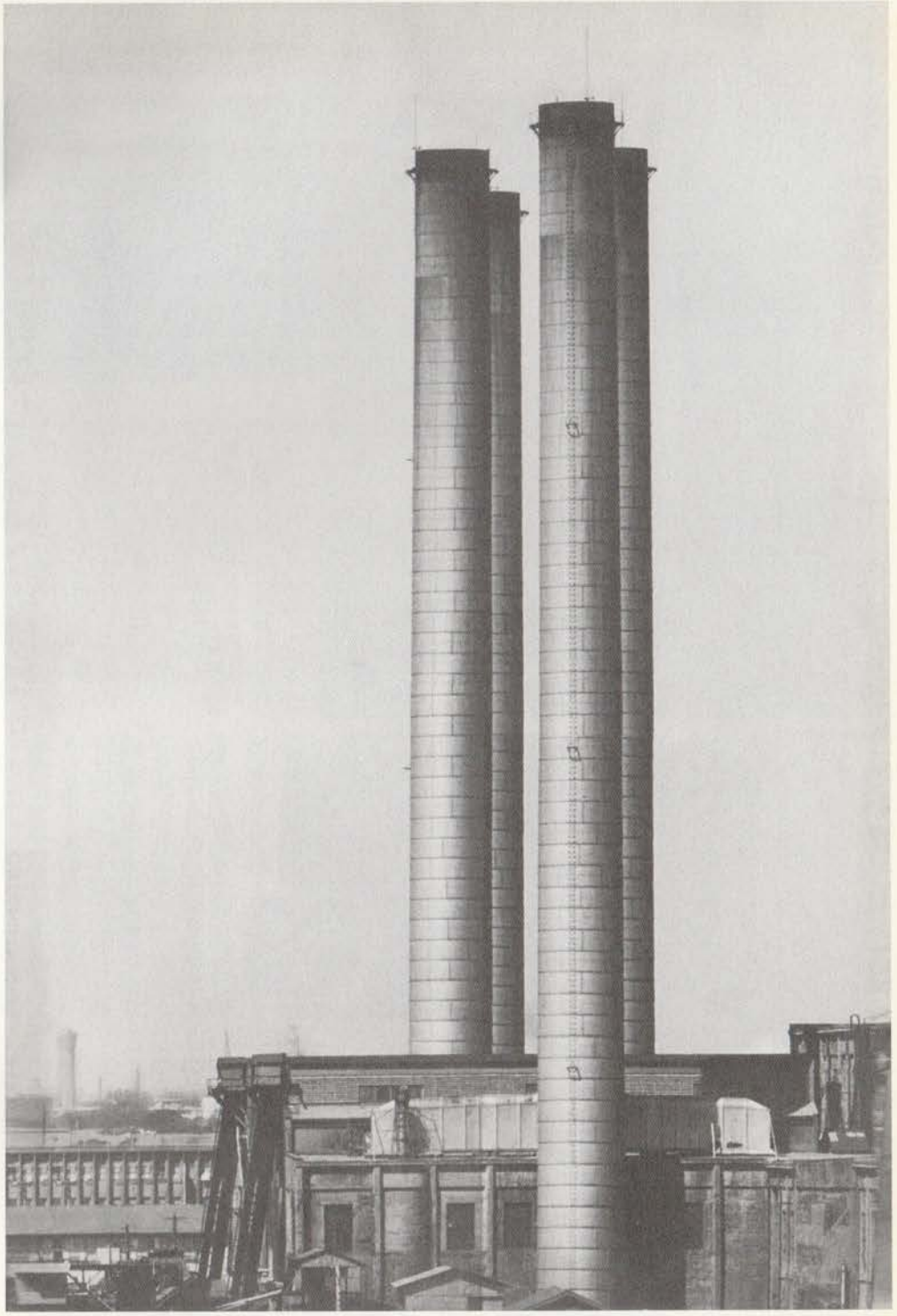
語り伝えも既に途絶えたとのことであったが、煙突の位置が一箇所なら特定できるとのことで、東京支店広報担当部長の宮原健一氏にご案内いただいた。

NHKの取材を受けたことから判明したという貴重な場所であった。社屋の先、グラウンドやテニスコートなどの更に北西側、資材センター通路横にかすかに見て取れる赤い小さなペンキのマークが煙突の中心跡だと伺った。巨大な煙突が撤去された跡のポイントのあまりのささやかさに却って、マークした担当者の、煙突へのいとおしい思いを感じてしまう。

更に北西側の旧足立区立元宿小学校校庭には、煙突の一番太い部分を利用した滑り台が設置されている。当時の校長とPTA会長の要請で入手し、六年生が卒業記念に奉仕活動で据えたという。（7頁左上カット参照）

内側に「四本煙突記念」プレートがあるが、単に記念の置き物とするのでなく、半円なのに滑り台に仕立ててしまったアイデアが何とも凄くて楽しい。

桜木の総鎮守とされる元宿壜稲荷神社。この辺りは葛飾北斎の『冨嶽三十六景武州千住』が描かれたとして知られている。「旧千住四本煙突守護社」と記入された碑があるが、これは平成5年にまちおこしの一環として建てられたもの。



写真は従軍カメラマンから転身して区立第十五中学校（現青葉中）の名物美術教師となられた故上野文明先生の作品。校舎からの撮影であろうかものの見え方がとてもユニークであった方の、独特な視点を感じる

お化け煙突みつけた

湯浅　博

町雑誌会員の宮田一男様からおばけ煙突の資料を送っていただいたいた内の、平成15年11月7日発行のサンケイ新聞キリヌキは、読者の皆様にも是非ご一緒に読んでいただきたい内容ということで、新聞社より許可をいただいて転載させていただきました。

江戸期の気分が残る明治のはじめに、「下町の北端はどこか」と聞けば、辛うじて浅草や鶯谷の町家が入ったかもしれない。ところが、いまならだれもが「下町」と答える千住の辺りは、不届きにも明治十五区からはずされていた。

「奥の細道」に出る松尾芭蕉は、千住の宿まで舟で来てここから歩いた。藤沢周平の小説『用心棒日月抄』でも、青江又八郎が東北の小藩に帰国する際、口入れ屋の吉蔵が千住まで舟をおこり、宿場はずれの腰掛け茶屋で酒を振る舞っている。江戸期、この地は奥州、日光、水戸の三街道への出口であった。

足立区千住が「下町」として一般に認知されたのは、ずっと下がって昭和28年の日本映画に登場してからである。理由は、隅田川と荒川放水路にはさまれて、ドンと天を突く東京電燈千住火力発電所の「お化け煙突」の存在であった。

五所平之助監督の「煙突の見える場所」。下宿人の芥川比呂志が隣人の高峰秀子に「まったくばかな話だよ。あの三本煙突が四本なんだ」とのセリフが雰囲気をよく伝えている。四本ある煙突が見る方角によって、お化けのように一本、二本、三本と変化していく。

来月、生誕百年を迎える小津安二郎監督も、千住界隈を好んでロケに使った。たまたま小津の哀愁漂う「東京物語」を見て、とたんに懐かしい気分に満たされた。

映画は笠智衆演じる老夫婦が尾道から上京し、堀切駅近くで町医者を営む長男宅を訪ねる場面から始まる。東京駅からのタクシーの中で、笠が「ここは東京の端だのう」とつぶやく。

小津のカメラは長女が営む美容院の背景に、黒々と煙を吐く四本煙突をとらえた。当時の人々にとって、あの煙突は東京の戦後復興を象徴するランドマークだった。

このモノクロ画面に共鳴する不思議なノスタルジーは、いつ、どこで見た残像だったか。

どうしても思いだせなくて、東京電燈の後身、東京電力に何か資料がないかを問い合わせてみた。昭和三十八年三月の「東電社報」の座談会を読んでいくうちに、謎を解くページがあった。当時の千住発電所の肥後静彦所長が「常磐線は三河島から北千住の間でこの発電所を中心に半円を画いているから一本から四本までがみえる」と述べていた。地盤の関係で四本を正方形でなく、ひしゃげて細長い菱形に並べたことが、お化けを生む結果になった。

大正十五年につくられた千住発電所は、渇水期にだけ運転していたらしく、煙が出たり出なかったり。これがお化け煙突の由来になったとの説もある。しかし、そんな理屈は電力会社の勝手であって、下町っ子にはやはり「オイラのお化け煙突」である。

秋田出身の同僚記者が、子供の頃に上京して、やはり都境の荒川放水路の鉄橋を渡った際、遠景にお化け煙突を見たという。東北人はここで、東京を強く意識した。そんな煙突も、昭和三十九年三月をもって取り壊された。

世の中には懐かしむのに飽き足らず、自宅に四本煙突をつくってしまった人がいる。荒川放水路北側の土手のすぐ下で額縁屋を営む山岸正弘さん（62）である。五階建てビルの上に、何の役にも立たない高さ四メートルの煙突が四本。日光街道を下って千住新橋を渡ると左手にその雄姿が見える。

「煙突を見ながら育ったもんでね。数件先の田中釣具店でエサ買って、川面のお化け煙突を見ながら釣り糸をたれた。遠くに遊びに行っても、煙突たよりに帰れば迷子にならない」

山岸さんが平成九年に自宅兼店舗ビルを建て直したさい、妻の桂子さん（57）に「屋根にお化け煙突でもつくろうか」と持ちかけた。冗談のつもりが、桂子さんは即座にガッテンした。四本煙突に夫婦で夢中になって、娘二人の意見を聞くのも忘れた。煙突の値段は数百万円也。下町っ子でないとできない洒落である。

ところが、深川生れの作家、宮部みゆきが小説の中で「北千住なんて都内じゃない」と若い女性に語らせている。どこかあか抜けないところが敬遠されるのか。いまの北千住駅前のにぎわいをみると、よさが分からぬ輩にはそれで結構だと思う。当の宮部がいうように「土着の東京人にも東京は見えない」のだ。

万物流転、興隆と没落が交互に現れるのが浮世の習いである。「千住」は時代を映す鏡であった。

記事提供／産経新聞社

つげ義春の描いたおばけ煙突

この短編は初期（昭和33年発行）の作品であり、御本人に伺うと既に記憶の外であると仰っていたが、それもやむをえないことと思う。たしかにストーリー自体も、実在のものとはかけ離れているが、おばけ煙突という言葉から連想されたであろう重苦しい独特な空気が、いかにもの『つげワールド』を形作っている。

昭和28年12月29日付の朝日新聞記事（06年4月16日付「泉麻人の東京版博物館」より）によると、「ハトを襲う翼のツジ強盗」というタイトルで、上野公園に棲む鷹が一羽、連日おばけ煙突辺りに出没して鳩を襲っているという記事が載っている。当時、鳩は平和の使者であり優秀なペットとして家の上部に鳩小屋を置いている家も多かったから、由々しき話題でもあったろう。ただし千住での聞き取りでは、煙突に鷹の親子が住んでいたという、好意的でほほえましい話も同時にある。

▲二見書房サラ文庫
昭和51年発行のもの

フィギュアになった煙突

本誌vol.6で、「こちら葛飾区亀有公園前派出所」略して「こち亀」の第59巻「おばけ煙突が消えた日」（集英社ジャンプコミックス1989年8月発行）を紹介、作者秋本治氏からコメントもいただいた。

小学校の代理教員をする女子大生に、いつも悪戯を仕掛ける三人組が、先生の帰郷に合わせて、全教室のカーテンを繋げて大書したお別れのメッセージを、煙突から下げる。

やがて煙突は解体されるのだが、長じて警察官となった主人公の両津勘吉に

「下町っ子にはその煙突は思い出だらけだよ！」

と語らせている。

その巻で荒川土手から煙突をながめる勘吉親子の姿が、何と食玩フィギュアになっていた。現在は販売されていないが、土手下に見えるおばけ煙突を父親の自転車の後ろで立ち上がって眺める勘吉少年は142ページの立体化で、バンダイが04年に販売した「こち亀ギャラリー」（全10種＋レアカラー）の一つである。

また、03年に一年間発売された月刊誌「毎月こち亀」5月号付録にも、堂々紙製おばけ煙突が登場していたという。

曰く「こち亀ファンなら誰もが知っている（?）『おばけ煙突』。昔ながらの駄玩具を彷彿とさせる『指から煙の出るシート』も付いています。」

希望の煙突

04年8月発行の「こち亀」第141巻「希望の煙突の巻」は、例の三人組と、彼らが惹かれる灯という歌手志望の少女の話だ。炭坑町に生まれてボタ山で遊んだ少女が、貯炭場の匂いに惹かれて「東京電灯会社火力発電所」の社員食堂で働きながら、煙突の上で懸命に稽古を重ね、ついに夢をかなえる物語りなのだが、千住火力発電所が、日本の電化時代のスタートに逆行するように老朽化していくのに加えて、燃料も石炭から重油に移行していくことで終焉を迎える話が、それに重なる。勘吉少年は

「この場所は東京タワーが建つまで東京で一番高い場所だったんだ だから とどくよ夢に」

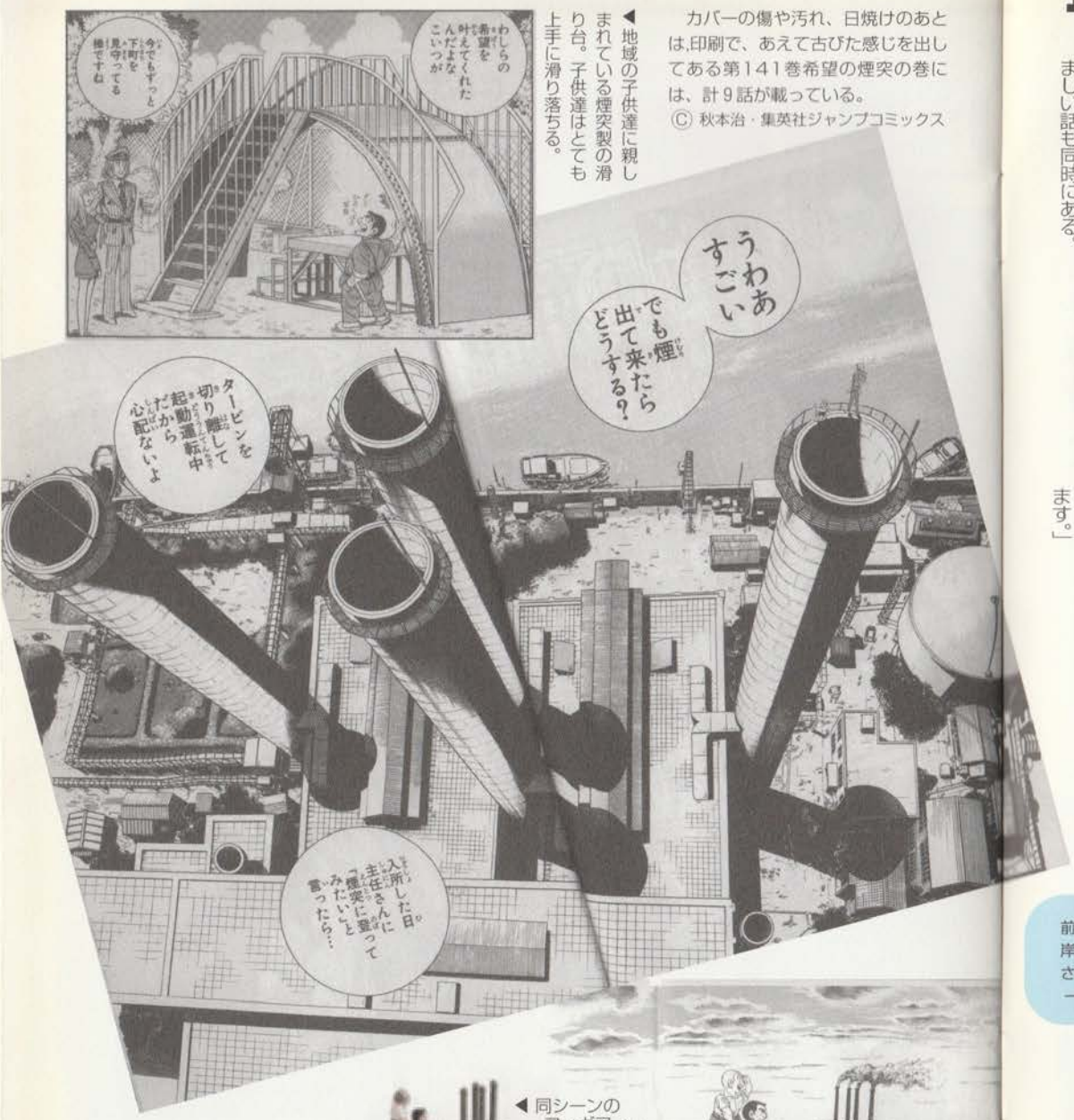
と励ます。

写真をもとに丁寧に描かれた多くの背景に作者の思い入れが窺える。24時間3交代で230人が働いている、などの細かい説明まで入って、この巻を読むと、おばけ煙突の知識がぐんと増えるのは間違いない。

前ページで紹介されている山岸額縁店。屋根の上の煙突もさることながら建物全体がユーモアに富んでいて楽しい。

カバーの傷や汚れ、日焼けのあとは、印刷で、あえて古びた感じを出してある第141巻希望の煙突の巻には、計9話が載っている。

© 秋本治・集英社ジャンプコミックス



◀地域の子供達に親しまれている煙突製の滑り台。子供達はとても上手に滑り落ちる。

◀同シーンのフィギア

◀紙製おばけ煙突

© 秋本治・アトリエびーだま／集英社・フジテレビ・ADK

はじまり・終焉・そして

昭和24年の千住の航空写真では極端にひし形の配列であった煙突がよく見える。現代の紅白の鉄塔を煙突の場所と解釈して、同じ場所からカメラを向けたものを当時の写真と並べてみた。

模型制作・現代の写真　柳下　勉

■プロフィール／柳下　勉　写真家　千住育ち　千住写真館グループとして千住・町・元気・探険隊とのコラボレーションも多い
http://www.yagishita.co.jp

▲木橋であった西新井橋上から　▲現代

現代▶

▲旧元宿小学校校庭から

▲現代

▼尾竹橋上から

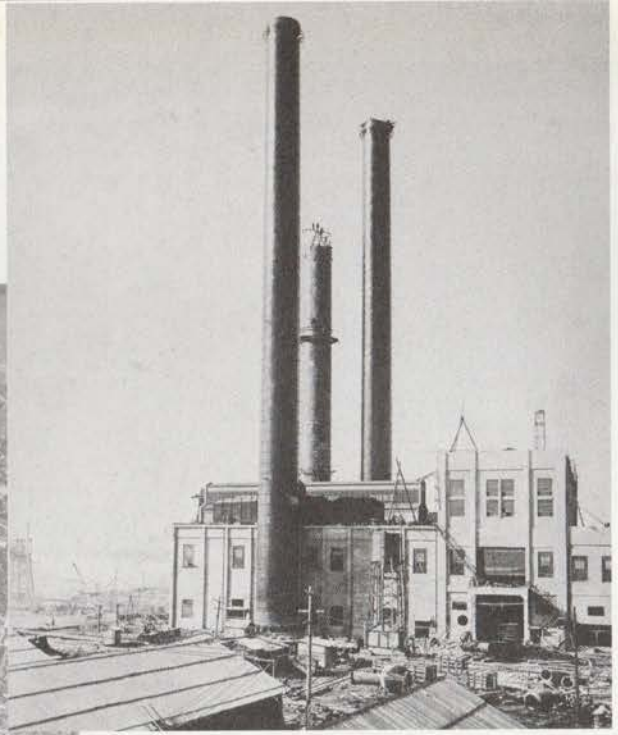
▲現代

▼南千住からの撮影。右手奥に千住大橋が見える

▲現代

本頁の地図は国土地理院長の承認を得て昭和24年撮影の空中写真（米軍撮影）を複製したものです。

荒　川
西新井橋
大正通り
墨田区役所
旧元宿小
尾竹橋
おばけ煙突
隅田川
墨堤通り
旧十五中
現青葉中
京成線
千住大橋駅
千住大橋



▲建設中という貴重な写真。煙突上に人が見える。半年間という短い工期で完成した（P28に関連エピソード）

▶役目を終えて、煙突は少しづつ、時間をかけて解体された

▼千住消防署
火の見櫓から撮影

現代▶

…そして今も

少年の淡い恋を描いた紺野敏武氏著による小説「煙が消えるとき」（京成社刊）は06年に発行された。足立区在住の直木賞作家朱川湊人氏の最新三部作「わくらば日記」（角川書店刊）も未完ながら、梅田を舞台として一巻目の表紙には、四本の煙突が描かれている。「三丁目の夕日」小説版でも登場家族を象徴する如く、煙突が現れた。

第二東京タワーの建設が決まった時、その予定地で劇団唐ゼミ（横浜国立大教授であった唐十郎のゼミから発生した劇団）によって「おばけ煙突」の芝居が上演されて、好評を博したと聞いた。

東京藝術大学音楽学部千住校の開所によって足立区との産学交流のなかで企画されたクリスマスコンサートがきっかけで、「おばけ煙突」のクリスマスタワーが出現した。06年12月から翌1月末にかけて、東京芸術センター東側の広場（千住一一四）に設置されたパンチングメタル製の筒が、夜になるとはるか天に向かって青白い光を指すという趣向で、その光は、かなりの距離からも目撃できた。今後も、この季節には登場するという。

本当に凄いもてっぷりだ。確かに現代は昭和ブームでもあるのだが、この「おばけ」はその真の由縁を、魅せるがごとく、単なるノスタルジーを気持ち良く裏切ってくれた。

実際、背が高くすっきりした姿態は美しかった。この煙突はすこぶるつきの誇り高きダンディで、モボだった。村中で一番！どころではなく本当に当時の、そして今でも確実に、知る者の心の中で日本一の記念碑であり続けている。

今回の特集では、多くの方々から貴重なお話をいただきました。いずれ形を変えて、改めてご紹介できればと考えております。おばけ煙突の思い出や感想も、葉書などで、どうぞお寄せください。

…光のおばけ煙突

千住火力発電所おばけ煙突（1926〜1964）を讃えて
―光の彫刻モニュメント―
制作者＝渡辺五大
制作協力＝東京藝術大学
美術学部彫刻科金属研究室
制作年＝2006年12月

千住がでてくる本

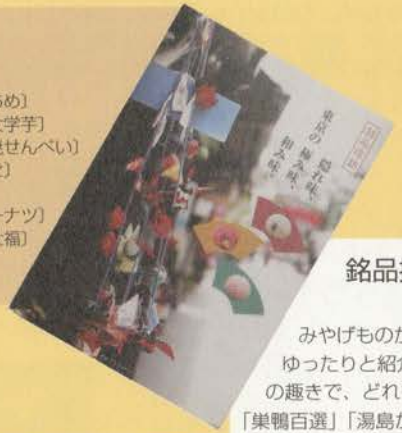
東京千住・深川物語

田中啓介著　現代書館　1,575円

表紙には小さな写真がみっちり並んでいるが、下方に巻いた腰巻きと呼ばれる別紙の下には置いていないなど、細部にも暖かさを感じる。忘れかけた日本がここにあると紹介していらっしゃる編著者が朝日新聞記者田中啓介氏。朝日新聞の「東京川の手版」に2003年10月から翌年3月まで続いた連載企画「千住物語」と2004年10月から翌年2月までの「深川今昔」が母体となっている。もちろん「お化け煙突」も登場している。田中氏の眼差しで、千住、深川、ならではの心の通い合いが語られる。

アツキヨ
金八先生
カラヤンの愛弟子
ヨーカ堂
お化け煙突
中華なにわ
野口ジム
はるかぜ
自動車教習所
尾崎ハウス
伝説の消防士
きいちのぬりえ
大橋眼科医院
千住金属工業
刺繍士
キッチンフライパン
名倉医院
経師
鮒奥安藤昌益
槍かけ団子
塩大福
森永民子
千住葱
武寿司
蔵のイラストレーター
千住大橋
雀焼き
紙漉問屋
曳き家
NTT千住ビル
畳屋薬

街案内
千住マップ
なか井〔矢立の初〕
石黒のあめ〔石黒のあめ〕
おいもやさん興伸〔大学芋〕
元祖平野屋〔炭火手焼せんべい〕
かどや〔槍かけだんご〕
たからや〔福俵最中〕
むさしや〔おからドーナツ〕
吉田屋餅菓子店〔塩大福〕
鮒秋〔鮒雀焼〕



銘品探訪　東京の隠れ味、極み味、和み味

ギャップジャパン　1,500円

みやげものから東京が見える。一軒に1乃至2頁を使ってゆったりと紹介しているせいで、単なるガイドブック以上の趣きで、どれも美しく、いとおしい。本中で「武蔵野から」「巣鴨百選」「湯島かいわい」「神楽坂まちの手帳」「谷中・根津・千駄木」のそうそうたるタウン誌に混ざって「町雑誌千住」まで紹介していただいた。千住として南千住駅から語られているのもユニークだ。けれど、トップに挙げられたなか井の最中「矢立の初」や「槍かけ松最中」「鈴也」、吉田屋の「塩大福」「いなりずし」が既に姿を消してしまっているのが何とも惜しい。

1、旅に生きた芭蕉の生涯
2、江戸での芭蕉のデビュー
3、芭蕉の陰棲
4、奥の細道での千住逗留説
5、芭蕉の評価に対する千住の対応
6、矢立初の碑の問題点
付録
1、足立区内の芭蕉句碑
2、足立区内の芭蕉像

史談文庫4　芭蕉と千住宿

―『おくのほそ道』にまつわる考察―

安藤義雄著

足立区郷土資料刊行会　頒価500円

ご存知、安藤義雄氏が芭蕉に関する長年の研究成果をひとつにまとめたもの。付録からは、伊賀上野で10月12日の芭蕉忌にしか開扉されない伊賀焼の芭蕉像と同一のものが、足立区立郷土博物館で常設展示されているのがわかる。

なぎら健壱さんの千住

「ミュージックライン千住」会場のうちLive Club Dandelionにて

なぎら健壱（なぎらけんいち）　フォークシンガー
1952年、東京は銀座、木挽町に生まれる。70年の中津川フォークジャンボリーに飛び入り出演がきっかけでデビュー。72年ファーストアルバム『万年床』をリリース。以後、ライブのほか映画、テレビ、ラジオでも活躍。著書に『下町小僧』『東京酒場漂流記』『日本フォーク私的大全』「東京の江戸を遊ぶ」など

千住中居町29-3三泉ビル地階
Live Club　Dandelion

場所は、かつて松竹映画を上映していた金美館のあった所というとわかりやすいかもしれない。ライヴクラブとして中々楽しめるスポットとなっている。

駅が同じになると駅に人間を合わせようとして、みんな一緒になっちゃうからつまらなくなっちゃうんですよ。駅なんかに合わせないでいいんです。自負を持ってほしい。「らしさ」を持つというのが一番ですね。

インタビュー　利岡健人
写真協力／廣瀬年実

駅前が変わりましたしね、なんか北千住の顔じゃなくなっちゃったなーていう感じがして、それがちょっと残念なんですけどね。「らしさ」というのが昔はどこの駅もありましたよね。それがだんだんらしくなくなっちゃうのがやっぱり残念ですよ。確かに地元は活性化だからどんどん変えたいっていうのは分かりますけど……。

銭湯

大黒湯は構えがいいじゃないですか。天井もいいしね。昔の作りっていう、そういうとこがいいですよ。銭湯っていうのは庶民文化の尺度みたいなとこがありましてね。体洗うだけじゃないんですよ。体洗うだけっていうのは家庭の風呂なわけでしょ。それにプラスアルファがあるわけで、それが人との付き合いだったりいろいろね。銭湯がそういったものの尺度とすると、全体がそういう風に希薄になっちゃっていう部分があるんですよ。銭湯みたいなとこが残っているっていうのは、町に近所の付き合いがあるし、下町らしさっていうか町らしさが残っているということですから。

銭湯を失うってことは町が変わっちゃったってことですからね。人情っていうか、全部を失っちゃうんです。挨拶の仕方も変わっちゃうし。子供たちが近所の人に対して必ず挨拶をしたり、背中流したりなんてことも失うわけじゃないですか。

家風呂みたいにすぐに出るんじゃなくて、涼みながらおしゃべりしたり、コーヒー牛乳飲んだり、そういう挨拶とか全てを含めた、人との付き合いだよね。それの尺度で一番見やすいのが銭湯だと思うんですよ。

ときわ通り

仲間と一緒に歩いていて、肩が触れた触れないで喧嘩になったときに、止めに入ったおじさんが千住警察の刑事だったっていうことがあったんでけど、人情豊かに我々をたしなめてくれましたよ（笑）。入り口の辺りはもつ焼きとか煮込みの店が結構あるじゃないですか、だからついそこで一杯やって気が大きくなっていたのかな。『甚六屋』の前を歩いていたときだったかな。

昔はあてもなくただブラブラ歩いていたからね。あの辺はすっかり様変わりしちゃったでしょ。旧日光街道なんかは雰囲気が残っていて素敵ですけど、アタシなんかすれ違う人みんなに挨拶をして歩かなきゃいけないようで、足が遠退いちゃう。そういうわずらわしさがあるから行かないんだろうな。こちらの立場を分かってくれて、話ができれば最高なんですけどね（笑）。

おばけ煙突

銀座から墓飾に越したから、あれ見ると、ここからが田舎なんだなっていうのがありましたよ。このへんのステータスであったしね。なんつーか、ほのぼのするんだな、あれ見ると。当時は常磐線乗っていると、みんなが一斉に同じ目になるんですよ。「あ、おばけ煙突だっ」ていう目をするんですよ。

今そういう建造物ってなかなかないでしょ。新幹線乗っていて富士山が見えても、みんなシラーっとして、反対に外国の人がね、「あ、マウントフジだ！　なんでみんな見ないんですか?」なんてことを言ってるわけよ。なんていうかほんのりさせてくれたわけ、そんな感じだな。子供は形が変わるのが面白いなんて見ていたけどね。反対に墓飾から出て来てあれを見ると、ここからが都会だなっていう気分になったしね。

当時はもう火力発電は需要が減っちゃって、余り操業しなくていいから、何日かにいっぺん煙が出ているわけですよ。変則的に煙が出るっていうのは葬儀場とオーバーラップして気味悪いから、そういう意味でおばけ煙突なんです。みんな勘違いしているんだよね。2本に見えたり3本に見えたりするからおばけ煙突というのは、後付けなんです。

知らない人に昔のものを伝えようっていうのは難しいから、ついないがしろにしちゃうけど、我々の心にあったものっていうのは、残しておいて欲しいっていう気持ちは、実際ありますよね

庭

下町全般がそういう感じですけれど、自分の中では千住という土地は日常だから、地元の方には失礼だけど、庭のように感じますよ。千住は宿場町だから下町じゃないけど、下町色を残してくれていますしね。当たり前に存在しちゃっているから特別視もしませんけれど、やっぱり自分のテリトリーって感じがしますよ。中にいる人間って、おもしろさをあんまり感じないじゃないですか。だってそれが日常だから。

千住でライブ

千住のライブハウスは他と違いますよ！　なんだか照れる。自分の家族が見に来るような感じ。それって、こっぱずかしいでしょ（笑）。

千住へひとこと

簡単にいうと「「らしさ」を残していただきたい」かな。先ほど言ったようにどこの駅も同じになっちゃってね、北千住も松戸も同じじゃしょうがないんだから。やっぱり北千住だなっていう「らしさ」が欲しい。　それは何かっていうと、なかなか説明するのが難しいんですが……やっぱり「ら・し・さ」ですよ。

お話のひとつひとつが、楽しくも鋭い素晴らしい時間でした。

●「ミュージックライン千住」

一枚のチケットで、複数のライブ会場を自由に行ったり来たりできる千住発の同時開催型ライブイベント。04年から始まり、年々規模を増やしている。ジャズ、ロック、ブルースなどの様々なジャンルの演奏を聴いて廻れる贅沢な二日間。06年は、ミュージックライン千住Vol.3「甚六屋トリビュート～伝説継承」をテーマに　立ちのみ虎や　cocktail bar COSMIC SOUL　Jazz Birdland　CRAWFISH　Live Club Dandelion の5店で、06年は3月18日19日、9月23日24日、に実施の他、「千住エキゾチックフェア」でも披露された。

●「甚六屋」

千住にあった、とんでもない酔っ払いのマスターがやっていた音楽好きが集まる飲み屋。夜通し語り合ったり演奏したり、大音量のレコードに合わせて踊りまくったり。ここでのライブから出発したミュージシャンも多いという伝説の店。06年はマスターの七回忌にあたった。

■インタビュアープロフィール／利岡　健人（としおか　けんと）　1979年神奈川県生まれ兵庫県育ち　現在千住在住。銭湯好きがきっかけで探険隊メンバーに。

廣瀬年実

ＴＶフリークが振り返る 千住ＯＮ ＴＶ 2005

2005年に発売された某雑誌の特集、
「これから流行りそうな町」ランキングで北千住
が一位だったというじゃないですか。
来てる来てるとは思っていましたが…。
大きな話題としては、つくばエクスプレスの開通がありましたね。
2005年もＴＶでは千住オンパレード、というほど
ではなかったにせよ、賑やかな一年でした。
それでは2005年の千住ＯＮ ＴＶを
おさらいしてみましょう。

▼20世紀のファイルから　風呂物語▲

（CS・ヒストリーチャンネル　1／16）

CS・ヒストリーチャンネルの番組表に「風呂物語」とあったので、もしかして銭湯の話題？という期待をしながら見てみると、いきなり北千住、そしてタカラ湯が。

40年働くお手伝いさん、薪で沸かした湯の柔らかさ、3時の開店直後はお年寄り、その後子供、夜は大人の社交場となるタカラ湯を、その歴史と共に紹介しています。

その他に、木で作る風呂桶屋、ツムラの入浴剤の歴史、最近のスーパー銭湯などを取り上げています。

この番組の良いところは、決して何か問題提起をするわけではなく、お風呂ってこんなに良いもんだよっていうことを坦坦と表現しているところでしょう。

▼NEWS23 街の銭湯を守るために…▲

（TBS　8／1）

筑紫哲也さんの報道番組の特集。古い銭湯をどうやって残していこうかという、こちらは番組の性質から必然として問題を投げかけます。北千住からはキングオブ銭湯の「大黒湯」、キングオブ縁側の「タカラ湯」が紹介されました。

▼小さな旅　湯の町きらり　千住▲

（NHK総合　10／9）

銭湯3連発と行きましょう。

旭町の「梅の湯」、元町の「タカラ湯」を取り上げました。タカラ湯のご主人松本さんは喋りが上手いなあ、と思ったので、後日お会いした時に話すと、「いやあ、うまくコメントできなくて恥ずかしい」とおっしゃってました。

我らが探険隊からも、ミニコミ紙「銭湯と言えば足立」編集の舟橋さんと表紙イラストなかだえりさんが、二大女優として出演しています。

▼あきない　事始め▲

（TV東京　11／5）

もうひとつ銭湯がありました。江戸時代の銭湯文化について、銭湯研究家の町田忍さんがお湯に浸かりながら説明します。2500軒以上もの銭湯を訪れたという町田さん、入浴姿が絵になりますね。ロケ地はまたまたタカラ湯。

▼東京みち探検隊！　国道4号▲

（東京MXTV　1／16）

林家こぶ平（現・正蔵）さんが子供たちと、毎回テーマとなる道路と街を探検する、という「ぶらり途中下車・道路版」といった番組です。今回は国道4号を探検。

日本橋、上野、と探検し、千住大橋から旧日光街道に入ります。ここで街案内をしてくれる千住の達人として登場するのが、本誌でもお馴染みの写真家、柳下勉さん。

本陣跡の山崎商店さん、次にサイクルショップKIKUYAさんに子供達を連れて行きます。さすが柳下さん、着眼点が違います。

しかし子供たちの琴線には今ひとつ響かなかったようで、「なんで自転車をやってるのですか？」という質問をされて困った柳下さん、最後にあちこちやさんの今川焼（自慢焼）で見事に彼らの心を掴んだようです。こぶ平さんに千住の感想を聞かれた、3年生のひかりちゃんは**「食べ物がおいしい町」**。いいですね。

5年生の美緒ちゃんは、**「「この千住の町が大好き」っていう人がいっぱいいます」**。美緒ちゃん、エライ！

ところで国道4号は日本橋から青森まで（740km）続く、日本一長い国道だそうです。勉強になりました。

▼いっと6けん▲

（NHK総合5／20）

NHKのお姉さんが千住大賑い会のみなさんの松尾芭蕉的町あるきに同行、芭蕉像、千住大橋、勝専寺を訪れました。次になかだえりさんのアトリエ&ギャラリー・蔵を紹介、そして、建設中の東京芸術センタービルの工事壁面を写真ギャラリーとして、道行く人に安らぎや楽しみを分けている「写真柳下」の柳下勉さんと共に、写真パネル貼りのお手伝い。連れていた犬を抱きかかえ、その犬に写真を見せているご婦人の姿が微笑ましかったです。

▼ウワサ検証人
～不思議な下町グルメ～ Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ▲

（TV朝日　2／2他）

正しくは庶民文化研究家の町田忍さんが、ある時は浮世絵、ある時はマルキン自転車柄のアロハを着て下町グルメの宝庫と言われる（？）千住の名店を案内しました。

Ⅰ、2／25　千住で2番　大はし
Ⅱ、6／3　焼きかつ　つくし
Ⅲ、10／9　そば　柏屋

この中で一番驚いたのが、柏屋さん。メニューには無いものの、本格的なフランス料理を堪能できるそうです。こちらのご主人は都

内一流ホテルで腕を磨いた料理人。何度か行ったことのあるお店なのに知らなかったです。

町田忍さんには、探険隊主催の町あるき12月10日の案内人として、大変お世話になりました。

▼なかだえりが選ぶ千住おすすめスポット▲

（ケーブルTV足立　10／14、21）

2週にわたり、なかだえりさんが千住の町あるきでおすすめの場所を案内しました。BGMは「はっぴいえんど」の"風をあつめて"、"空色のくれよん"、"風来坊"と続きます。個人的な意見ですが、一番千住に似合うと思っていた曲たちが流れてゴキゲンです。

千住2、3丁目編（10／14）

第5位　勝専寺
第4位　石黒のあめ
第3位　大橋眼科
第2位　中川園に続く路地
第1位　にこみの大はし…「にこみの」というところになかだえりさんの気持ちがこもっていますね。

千住4、5丁目編（10／21）

第5位　横山家
第4位　名倉医院
第3位　まつもとや
第2位　かどやの槍かけだんご
第1位　梅の湯…五丁目の梅の湯は、目の前で息子さんがフレンチレストランを開いています。

▼なかだえり 水彩画 蔵展8▼

（ケーブルTV足立　5／17）

今や千住の吉例行事となりました。もちろん私も行きました。いつもすごい賑わいです。開催するにあたっての模様替えとして、初めて二階の畳をすべて上げたところ、墨で書かれた漢数字「壱、弐」などが板の間に現れました。隙間からは一階の様子がちらちらと窺えます。改めて古い蔵だったんだなあ、と感動しました。今回は日経新聞plus1に連載されたコラムの原画をすべて飾ってあり、中でも堀切駅には私をイメージした少年（？）を描いてくださったそうなので真剣に購入しようかと思いましたが、売約済みでした。落胆と安堵の間に揺れる複雑な恋心、といったところです。

▼江戸の暮らし～宿場と寺子屋～▼

（放送大学　5／17）

4月に我々探険隊向けの詳しい町あるきを指導してくださった安藤義雄さん（足立史談会会長）が、講師として千住宿を中心とした江戸時代の寺子屋教育について、アカデミックに講義されました。その知識の奥深さには驚嘆するしかありません。町あるきの後に「千住の永見」で飲みながら伺ったあの話やこの話は、アブナクて決してここには書けません・・・。

▼東京の散歩道▼

（BSフジ　12／25）

12／10のまちあるきの際に、TVクルーと遭遇。それがこの番組でした。「ウマイ！下町食べあるき街道」というテーマで千住から日暮里までを歩きます。勝専寺、横山家、絵馬屋の吉田家を紹介した後、かどやの槍かけだんご、5丁目の梅の湯、甘納豆の大塚製作所、名倉医院、荒川土手、ときわ通りを通って喫茶蔵、ニューあわや、やっちゃ場、足立市場の椎橋食堂、千住大橋を渡り、南千住、三ノ輪、三河島、そして終点の日暮里へ。お疲れ様でした。この番組、「取材側は一切カメラに映らず、答える側はカメラ目線」というお約束があるようで、結果、自分が歩いているような気持ちになれるという、お気楽極楽番組となっています。

▼ラジかる！！▼

（日本テレビ　11／23）

芸人・レイザーラモンHGが、スーパー田中東口本店（旭町）の1日店長となりました。「HG」の形に鋲を打ったオレンジのジャンパーと白い長靴は、田中専務が用意してくれました。熱狂する野次馬にパニック寸前の店内。さて、店長としての仕事です。野菜売場に買い物に来ていた上品な奥様に腰を振らせて、大根を10円にしました。次は「鮮魚コーナー、フォーッ！」、またまた上品な奥様に、突き出したお尻をバチコーイと叩かせ、生イカ1パイ10円に・・・。

翌日買い物に行くと、昨日は大変ご迷惑をお掛けしました、というアナウンスがエンドレスで流れていました。

▼3年B組金八先生　年末スペシャル▼

（日本テレビ　11／23）

11月にはTBSのロケ隊に遭遇、あの卒業から9ヶ月ぶりに帰って来ました。そして「しゅう」君も帰って来ました。しかし、いつの間にロケしたんだろう、っていうくらい千住の風景が登場しましたね。金八マニアとしては『麻薬撲滅チャリティマラソン』に参加したかったなあ。でも、以前河口湖マラソンを走った時に、70代のお爺や、世間話に夢中のオバさま軍団に次々と追い抜かれた事を思い出しました。関係無いですけど。桜中学のモデルとなった足立二中は無くなりましたが、ガンバレ金八先生！定年の日まで。

▼▼▼ 番外 Time For Brunch ▼▼▼▼▼▼

（J-WAVE 2005/3/6）

仲町在住のSさんが、「今、タレントの"はな"ちゃんに会ったよ」と興奮していたので、J-WAVE（FM）の「Time For Brunch」で特集されるのを心待ちにしていました。その一週間後に放送されました。荒川土手、勝専寺、喫茶蔵、石黒のあめ、カレーバーGAKUを訪れました。FM放送なのでもちろん映像はありません。しかし、荒川の鳥のさえずりや人の声の広がり、石焼カレーのお焦げなどのなんと臨場感溢れる音でしょうか。匂いまでもが伝わってくるようです。想像力の素晴らしさですね。この番組、生放送のスタジオではメールでコメントを募集していたので、早速送ったところ、最後に番組の本「はなの東京散歩」当選者として呼ばれました。また感激！

←ロケ風景撮影／黒沢ミユキ

廣瀬年実

TVフリークが振り返る 千住ON TV 2006

さて、2006年に入りますと、千住ON TVが少なくなってきました。一時期の駅前激変＆つくばエクスプレス狂想曲が終り、落ち着きを取り戻した、という事なのでしょうか。

▼ちい散歩▲

（テレビ朝日　7／3、11／17に編集版）

地井武男さんが、帽子にリュックという町歩きの基本的なファッションで各地を歩く番組です。

今回は千住大橋から歴史プチテラス、槍かけだんご、トーフショップむさしや、石鍋青果店、葱茂（千寿葱）の前では千寿葱の網焼きとてんぷらをご馳走になります。千住ほんちょう公園でブランコに乗った後、喫茶蔵で今日の想い出を絵にします。地井武男さんは葱茂の若旦那を描きました。今回のヒットは石鍋青果店だと思います。なぜなら、撮影慣れしていないので、お店の若い女の子がケータイで一所懸命に写真を撮っているのが映ってしまいました。

▼おもいっきりテレビ▲

（日本テレビ　10／23）

ご存知、お昼の生放送。今日の「みのカメラが行く」は増英蒲鉾店から。数日前から店に貼り紙がしてあったので、雨にもかかわらず、映りたがりのおじちゃんおばちゃんで大繁盛です。名物の千住揚げの製造工程を実演。千寿葱、アサリ、マグロ、金目鯛を使っているそうです。こんなに高級な揚げ物だったとは・・・。さすが生放送、ご主人、揚げたて千寿揚げを食べる実演までさせられました。

▼映像散歩　東京～面影▲

（NHK総合　11／1他）

深夜3時～4時半頃、千住を始めとして、谷中・根津・池之端・日暮里・根岸・京島・早稲田・佃・向島、等のノスタルジックな風景を、大貫妙子、矢野顕子の曲をバックに坦々と説明も無く流す素敵な番組。番組の隙間を埋めるために作られたフィラー番組なので、新聞の番組表に載る事が無く、また、バリエーションが非常に多いので、根気よく準備をしていないと録画できない、マニア泣か

せの番組です。

千住からは、中川園の蔵、煎餅の平野屋から見た石黒の飴、福寿堂、福水旅館の路地、4丁目の路地、が映ります。しかし曲名以外のテロップがないので、他にも千住の風景が含まれているのかもしれません。

▼乙女屋雑貨店▲

（NHK総合　3／27）

きいちのぬりえ特集、ということで見ていたら、「ジュンコちゃんはぬりえの中の少女になろうとした」というナレーションと共に見慣れたお顔が・・・。あらまあ編集長じゃないの。写真館で撮影するときに、きいちのぬりえの女の子のポーズに随分影響を受けたそうですね。蔦谷喜一さんには町雑誌11号で大変お世話になりました。

▼新・東京百景▲

（東京MXTV　11／4）

EXILEのリーダーHIROと作家・百瀬博教が町を歩きながらのトーク・セッション。色々な意味で斬新な番組です。

まずは千寿葱の「葱茂」で網焼きを食べます。若旦那は葱嫌い（！）だったけど、千寿葱だけは食べられるそうです。次に千住警察の並びにある普通のクリーニング屋の小松屋クリーニング。千住ONTV史上初登場で、なんでこんな所を

と思ったら、ここはかつて「小松亭」という寄席だったとか、恥ずかしながら知りませんでした。古い写真からは広沢虎蔵（二代目）の名前も。ここの通りは千住で一番賑やかな通りだったそうですね。

槍かけだんごに立ち寄ったあと、なかだえりさんの蔵へ。しかしここで視聴者が心配するような会話がそのまま放送されていて、ドキッとしました。百瀬さんは初対面のなかださんに相当興味を持ったようで色々突っ込むのです。

「珍しいよな、○○○モンの暗さが無い」

「アナタにならお金を出す、みたいなボーイフレンドはいっぱいいるんですか？」

「お母さんが見に来たらボクは押入れの中で・・・」

東京ローカルだけでは惜しい内容です。

▼トピックスあだち▲

（ケーブルテレビ足立　3／26他）

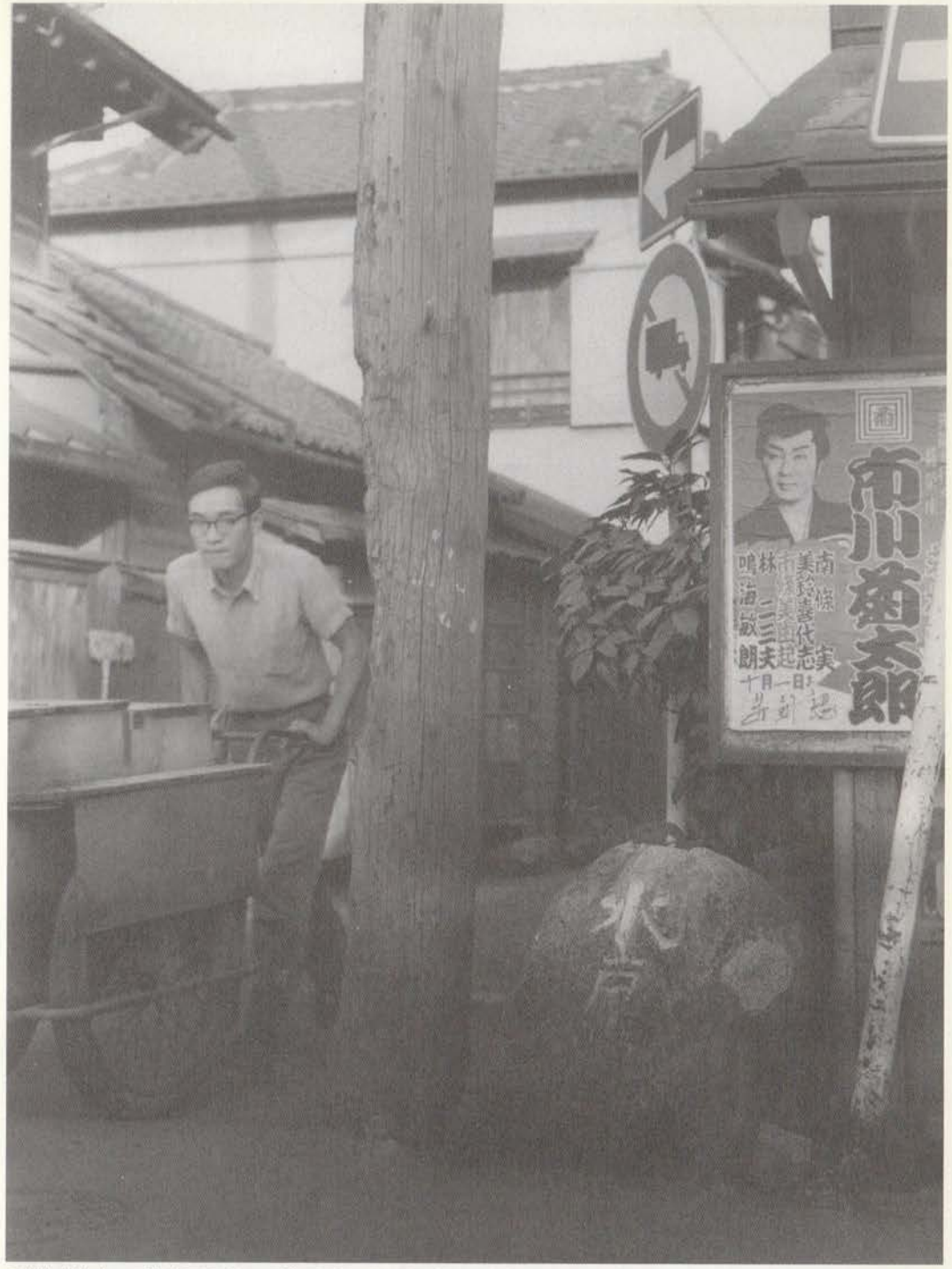
いつも千住を取り上げてくれるこの番組ですが、今回は特に3／27の「ミュージックライン千住vol3」について書かせて頂きます。

これは千住の数軒のライブハウスで同時開催されるライブに、1チケットで自由に行き来できるという面白い企画です。

vol3では、かつて千住にあった伝説的ライブハウス「甚六屋」へのトリビュートを掲げ、甚六屋にゆかりのあるアーティストが多数出演されました。

さて、その中のひとつ、「Dandelion」には、なぎら健壱さんがいらっしゃるというので、町雑誌の取材の約束を取り付けました。ノリノリ大盛り上がり大会のライブ終了後、15分ほど話を伺いました。ライブの時とは違い、真面目に答えるなぎら氏、視線は決して合わせようとせず、さりとてぶっきらぼうと言うこともなく、きちんと話しをしてくれました。千住で演（や）るのは、家族の前で演るみたいでやりにくい、と仰ってました。

千住ブームも最近は落ち着いたものの、一つのテレビ番組に何軒もの制作会社が複数の案を提出することもあるので、実際に放映されるよりもずっと多くの下見もあり、同じ日に同じテーマの質問をされることや、今までウケたものの追随をしたいので教えて、という問い合わせすらありました。タウン誌の担当者としてご照会を受け、ご案内した方の全てが、千住を心底気に入って、想像以上に楽しいと感じて下さったのがとても嬉しい上に「千住」が単にブームとして、やがて消えてしまう存在ではない頼もしさを、強く実感しています。　編集人より



手押しリヤカーで流す豆腐売り。千住五丁目の旧日光道中から折れて水戸佐倉道に向かう辻は、水戸海道と刻まれた石が置かれているが、現在は足立区立郷土博物館に保管されている。寿劇場の芝居ポスターが見えるのも興味深い。

千住タイムトラベル 11

この連載は、千住の町を西へ東へ歩くだけでなく、少〜し過去へも歩いていただくための道しるべです。

■あの頃の音、声、匂い■

其の二

写真・文：石坂満／郷土写真家

■プロフィール／石坂満　郷土写真家として知られている。足立区の歴史資料となっている写真の多くは氏の提供によるもの。17号特集千住の肖像「千住育ち」で紹介

其の一では千住の町の全般のことを書いたのだが　この度は人の声について又独特の仕草について思い出してみたい。昭和十年前後の話が多いので若い方にはピンとこない事が多いかもしれないが、そんな時には、おぢいチャンおばあチャンに聞けば又当時の話で花が咲くこともあると思う。

昭和二十五、六年頃から、特に電化製品が普及してから生活様式が急速に変わり、春夏秋冬、季節の変わり目には独特な行商（品物を持って売り歩く人）があって楽しみだったが現在では少なくなり淋しいものだ。

春になると千葉の浦安方面からの漁師さんが、「アサリ、シジミー」「アサリハマグリはいらんかえー」と手押しリヤカーを押しながら大声で売り歩く姿がなつかしい。子供達はその言葉を真似して「アッサリ死んでしまえー」ともじって云って、大人たちを笑わせたもんだ。

「トーフ」「トーフ」というラッパを吹きながら、岡持の深いのに豆腐を入れて天秤棒でかついで歩く姿もなつかしいが、いつの間にか自転車になり現在も自転車だ。しかしこの頃は「トーフ」「トーフ」とは云わないで、お得意様だけ廻っているようだ。

今は見かけないのが納豆売りで、昔は納豆は藁に入っていた。「ナットー、」「ナットー」「いばらぎナットー水戸ナットー」と茨城弁のおじさんが箱の中に納豆を入れ、肩に背負って来た。小さい丼を持って出てゆくと藁をあけて丼に入れ、刻みねぎや練りとうがらしをサービスにしてくれた。

親孝行の子供がやはり「ナットー」「ナットー」と売りに来るので、その子に同情して買う人が多かった。当時のアルバイトであるが、寒い冬の朝など子供心に偉いなと思った。

竹竿売りも昔からあって、「タケザオー、タケザオー」と、四、五本の竿を肩にかついで歩いていた風景があった。今は自動車に乗せてマイクで声をかけるので随分と変わったものだと思う。

まだまだいろいろあるが、それらは後の稿にして、ここで書いておきたいのは、毎年新潟からやって来る毒消し売りの娘さん達のことだ。絣の着物に手甲脚絆、菅笠で歩いている姿は本当に絵になる風景だった。

「ドクケシはイランカネー」と云いながら二、三人が一組になって歩く姿は早春の風物詩の一つとして、今でも頭の中に焼きついている。

千住の町は、下町の下町で、浅草、日本橋と違い気安さがあり、商店も越後屋という屋号の店が多いので、気軽さも手伝って多く見えるのではないかと思う。千住の横丁横丁を廻り、お得意様の家には中まで上がり込んでいた。私の家にも来ていた。

扱いは主に毒消しで、薄い緑色をしていて数多く飲む胃腸薬なので子供にはあまり魅力はなかったが、話が新潟の話で面白く、各家庭では人気があった。

嫁入り前の娘さんが多く、修行のためでもあったが、この仕事が縁でお得意さんの仲人でお嫁に来た話などもよく聞かされた。

当時の青年の、あこがれの女性たちであったのかもしれない。

●行きつけの店●

ワインバー Vino-Flute【ヴィノ・フルート】

vol. 06

イラスト・文／なかだえり

場所■東京都足立区千住2－32マスダビル2階
営業■午後5時半～12時半（日曜定休）
電話■03-3879-1810
URL■http://www5.ocn.ne.jp/~vino/

2軒目か3軒目あたりに、ついつい立ち寄ってしまうのが、ここヴィノフルート。　ワインが大好きなわたしは、焼き鳥&ビール、煮込み&焼酎、お刺身&日本酒…何を飲んだり食べたりした後でも、1日の終わりをワインで締めくくりたい。

棚やカウンターの上にずらりと並べられたボトルはざっと200種。そのうち50種ほどはグラスでもいただけるから、その時の気分にぴったりのものに出会える。ワインに詳しい人はもちろん、あまり飲んだことがない人でもご心配なく。白、赤、甘い、すっぱい、軽い、重い、渋い、イチゴみたいな香り、リーズナブルなもの、リッチなもの、どこどこの国を旅行したときに飲んだ…自分なりの言葉で伝えれば、ムッシュが丁寧に教えてくれ、適切に選んでくれる。

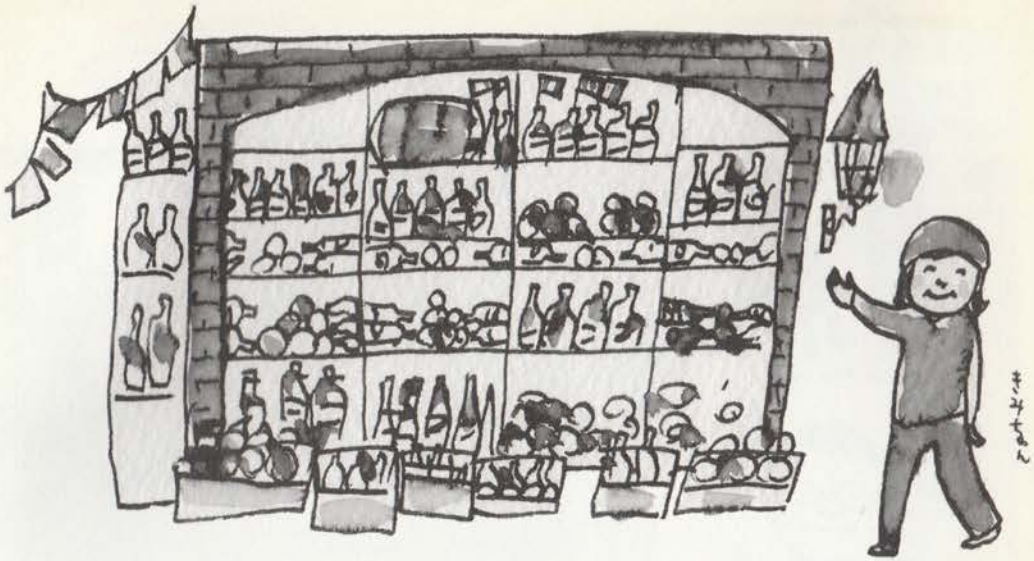
ワインには豊富に取り揃えられたチーズを合わせたい。わたしのおすすめは、「アルプスの少女ハイジ」に出てくるような丸くておっきなチーズ。焼いて、とろりんとパンやポテトにかければ「ラクレット」。自家製チーズピッツァも美味しい。また近頃の看板メニューは、ムッシュ が打つ日本蕎麦。最初は裏メニューだったが、今では週3回打つほど人気になった。独自の研究を重ねたつゆには、こだわりの利尻昆布 やシッポクしいたけの他、赤・白ワインも入

ムッシュは、チェロやフランス語も習っている。遊びのための勉強 が好きなんですって。たまに生演奏も披露してくれる。

カウンター11席、わたしは手前のくぼみ席がお気に入り。お店の外にある看板用イラストもここで制作。他、テーブル4卓18席。ワイン講習会やチーズの講習会、プロによるサロンコンサートなども定期的に行っている。毎月第4日曜日は会費制ワイン会で、6～10種類くらいを味わう。

●ワインプチ講座　イラストマップ：ムッシュ池田

■プロフィール／なかだ えり　1974年岩手県生まれ。街並み調査がきっかけで99年から千住に。約190年前に建てられた「蔵」をアトリエとし、フリーランスでイラスト、執筆、建築設計など多分野で活動中。職住近接の暮らしが気に入っている　http://www.nakadaeri.com



「池田屋」は創業70年というから、生まれたときからお酒に囲まれていたわけだ。お酒好きにとっては、うらやましい環境。店内奥には、ワインコーナー。ムッシュの妹きみちゃんや看板娘の白い秋田犬ユキちゃんなど、家族や親戚で、アットホームに働いている。

ってるので、おつまみとしても良く合う。

ところで「ムッシュ」とは、店主でシニアソムリエの池田茂さん。千住柳原の酒屋「池田屋」の息子で、生まれも育ちも千住っ子。幼稚園、柳原小学校、足立区立第二中学校（現存せず）と千住で育ち、大学卒業後は、すぐに家業の池田屋を手伝いはじめた。

「ヴィノ・フルート」は1986年、37歳の時に開店。店名は、ムッシュが愛して止まないワインと音楽から付けられた。「Vino」はイタリア語でワイン、「Flute」は楽器フルートのこと。まだワインがあまり日常的でなかった時分からはじめ、去年12月24日のクリスマスには、20回目の開店記念日を迎えた。

この店に寄りたくなるのは、ワインとムッシュはもちろんのこと、お客さんも素敵だから。地元の常連客は特に個性的な面々。通称「千住の夜巡りさん」こと「ヘアーサロン野平」のお父さん（17号掲載）は、銭湯に入った後に近所の飲み屋を数軒ハシゴ。「千住の寺内貫太郎一家」こと長谷ファミリーは、なぜかこの店が家族団らんの場所。東銀座の居酒屋「傳八」店長の船ちゃんは、店の帰りにほぼ毎日来店。杉浦さんは上野センタービル地下1階のアジア食材「野沢屋」マダム、今宵もお麗しい。遠方からもワイン好きや音楽家、ジャーナリスト、料理人、医者などいろんな人がわざわざ来たりして、知っている人も知らない人も自然と話が弾む。この愉快な雰囲気が、どことなく千住らしい感じがする。ワインには人を優雅で和やかな気持ちにさせる成分が入っているに違いない。今日も幸せ気分で眠れます。

池田屋酒店・イケダヤ ユキ柳原店
場所■足立区柳原2-7-6
電話■03-3881-2121
イケダヤ ユキ 旭町店
場所■足立区千住旭町13-10
電話■03-3881-2248

レイアウト／渡辺あつ子

千住の思い出 4

髪結い

安藤義雄

近年、ヘヤーサロンが増えた。ガラス張りで室内丸見えの店が目に付く。ピアスをし無精シゲを生やした茶髪の針鼠が、怖い顔して女の髪を逆立てスパスパとハサミで切り刻む。いまやヘヤーデザインは多様。日本髪は結婚式ぐらいしか見掛けられない。新橋の芸者だって営業の時だけカツラ。何でも歴史、女性の髪のルーツをたどってみよう。

昭和の初めに生まれた筆者には、いまの髪型は男女を限らず乱髪としか思えない。やはり日本髪の襟足が懐かしい。生まれた時から周囲の女性はみんな日本髪だった。だからパーマネントが七十年前登場し、頭にかぶせるお釜を置いた美容院が出現するまで、襷がけの女髪結いが羽振りを利かしていた。

千住仲町で過ごした小学生の頃、母が通ったのは「おつねさん」という髪結師匠。二日に一度は髪を直していたから、その日の放課後は直接髪結いに行き、母が結い終わるまで過ごしていた。髪結いには師匠の他に梳手という若い娘の下働きがいる。時々顔を見せるのは「髪結いの亭主」。女に働かせぶらぶらしている男の代名詞でもある。おつねさんの亭主は元胡坐商人の呉服屋、店の前で夜店を出し、その男振りに師匠が惚れて一緒になった。愛想がよくて誰にももてる。そのため姉さん女房の焼き餅で年中痴話喧嘩。その光景は子供ながらに愉快であった。

今では想像も付かないが、江戸時代からの習慣で当事の女は髪を洗わない。髪の毛を鬢付油という、モクロウで固めたグリスのような髪油で髷を固めるから洗っても尋常には落ちない。だから、梳手が髷を解いて崩すと、角丸という太い歯の櫛で頭の地肌を掻きフケを落とす。これを客は黒いセルロイドの板で受けるのだが真っ白になる。髪の毛もフケだらけ、落とし終わると、こんどは目のつんだお六という梳櫛にちじれ毛を絡ませて丹念に梳き、髪の油とフケを綺麗にこき取ってしまう。こうしてまるで洗ったように髪を手入れしてから師匠が代わって髪を結う。元結いの端を歯でガッシリ押さえ、束ねた髪の根元をキリリと縛る。痛いから客は顔をしかめるが、これが緩いと髪はすぐに崩れる。だから昔の女の脳天は丸く禿げていた。娘は桃割れか島田、主婦は丸髷である。

母は人並み超えておしゃれだったから、おつねさん贔屓で盆暮れの中元お歳暮には、三越から結構な贈答品を送り、梳手には平素の心付けとは別にご祝儀を渡した。時には師匠にコートや着物を贈り、また、芝居に招き上野の小料理屋で夕食をご馳走した。

江戸風俗調査で、その昔も髪結いに衣服を与え芝居、割烹に伴うとあって驚いたが、幕府が奢侈だと禁令や制限で、自梳を奨励した。そういえば、子供の頃もほとんどの女性は自分独りで髪を結っていた。面倒な人は髪を後ろで丸く束ね、洋髪風な束髪にしていた。

■プロフィール／米津誠太郎（よねつせいたろう）　千住に在住の照明コンサルタント。「あかり」をキーワードにライフスタイルを研究し、ユニークな照明講座や執筆活動を行っている。

テンテケ、ツクツク

ときどき散歩、ドキドキ散歩 2

写真／文　米津誠太郎

図書館の帰り、いつもと違う道を歩く。寒さが和らいでくると、散歩の時間が長くなる。景色を楽しみながら、ついつい遠回り。通りを行き交う人々、商店や工場の活気ある様子。アスファルトの路面を丁寧に掃いていたり、立ち話しする姿がある。玄関や門扉越しに、暮らしの気配を感じる。庭木が塀を超えて道へ延びている。

ふと、ブロック塀にかかった掲示板に目が留まった。町内の様々なお知らせに混じって、ちょっと気になる貼り紙がある。神田囃子を始めよう、生徒募集中、レッスン無料。はて、「神田囃子」ってなんだろう?そこには今年のお祭りが大祭にあたること、それに向けて氷川神社にて練習をします、と書かれている。写真を見ると、小さい和太鼓が3つ、木製の笛や鐘を持った人たち。ふ～ん、こんなふうにして「お囃子」を奏でるんだ。

あーっ、そうか、去年の宵宮で聴いたアレだ!お囃子衆は山車にのっかって神輿の前を行く。その響きが神輿の担ぎ手を盛り上げ、華やいだ雰囲気を作り出す。提灯や地口行灯の明かりが柔らかく灯る情景とともに、心地よい音を思い出した。

神田囃子に興味はあるけど、伝統芸能ってなんだか敷居が高そうだなぁ。どんな人がやってるんだろう。恐る恐る電話をかける。

「あのぉ、掲示板を見たんですが…」

すると、

「まぁ、とにかく一回練習来てみてよ、来月の第一月曜日。氷川神社、わかる?」

とのこと。こんなふうにして神田囃子の練習に行くことになった。その日、境内へ近づいていくと、小気味良いお囃子のフレーズが聞こえてきた。テンテケ、ツクツク、テンスケテン、イヤ、テンテケ、ツクツク、テンスケテン…

情報は掲示板から町の人の間へ伝わっていく。南イタリアでも同じだ。路が交わるところや広場などに告知の場所がある。建物の壁にイベントや映画のポスター、行政の連絡からお葬式のお知らせまでが貼られている。道行く人々が眺める。何人かが立ち止まれば、おしゃべりが始まる。これは何処そこの近くだ、この人は誰それさんの知り合いだよ、この映画とても面白い、なんてふうに。

五丁目、四丁目、三丁目、仲町、旭町、柳原…千住はどこを歩いても掲示板によく出会う。そこには温もりのあるユニークな貼り紙が掲げられていて、人と人との出会いを作り出す。もちろん言葉が交わされて、何かが始まることだってある。

僕には掲示板が輝いて見える。

千住のヒト・モノ・コト、千住の情報をお寄せください。

町雑誌千住はここで買えます！お近くのお店でお求めください

●千住旭町／アサヒ書店　旭町歯科医院　とんかつもりき　丸善ら・があるルミネ北千住店　よしだや　●千住東町／ヘアーサロンノヒラ●柳原／ゑびす屋　●千住一丁目／喫茶蔵　コバガーデン　焼かつつくし　椿屋　日の出屋　前田クリーニング店　ゆうらいく●千住二丁目／五味鳥　千住の永見　ぶっくらんど　●千住三丁目／珈琲物語　メンズギャラリー福田　渡辺優文堂　紀伊国屋北千住丸井店　●千住四丁目／五門　酒の花栗屋●千住五丁目／梅の湯　ラ・ルミエール●千住大川町／ホシノ理容室　山口書店●千住寿町／大黒湯●千住元町／タカラ湯　モカ●千住柳町／一やなぎ　金乃湯　ニコニコ湯●千住竜田町／アリス　喜田家本店　●千住中居町／北嶋書店　コロラド●千住宮元町／高原書店●千住仲町／小桜湯　まじ満●千住河原町／不動産のカサマ　武寿司●千住緑町／魚源　オリーブ　しずか屋　中村屋　パレット　●千住外／喜田家梅島店　小泉書店　ブックステーション小泉　書肆アクセス

●この他にもあります。お問い合わせください。
●町雑誌千住を販売してくださるお店を募集しています。ご協力いただけるお店はご連絡ください。

バックナンバー販売店

アサヒ書店
笠間産業
喫茶　蔵
北嶋書店
紀伊国屋北千住丸井店
高原書店
ぶっくらんど
丸善らがある北千住ルミネ店
渡辺優文堂
書肆アクセス（神保町）

通信販売取扱店
ビーアンドエス
Tel　03-5808-1278
Fax　03-5808-1279
Email:
senju1010@10ants.com

■ちい散歩に登場！■
P18にもある地井武雄さんがまち歩きする、テレビ朝日の番組。3／22撮影分のテーマは何と「おばけ煙突」。今回は千住タイムトラベルの石坂満さんが出演しています。

町雑誌千住

VOL. 1 千住の祭
VOL. 2 銭湯めぐり
VOL. 3 飲み処食べ処
VOL. 4 千住宿を遊ぼう
VOL. 5 千住の餅菓子屋
VOL. 6 映画文学の舞台となった千住 前編
VOL. 7 映画文学の舞台となった千住 後編
VOL. 8 千住手仕事職人の世界
VOL. 9 千住手仕事職人の世界 千住の年中行事
VOL.10 ネコの眼路地歩き 千住の年中行事
VOL.11 きいちのぬりえ 千住の年中行事
VOL.12 千住の魚河岸
VOL.13 荒川 PART1
VOL.14 ランチ PART1 遊廓があったころ
VOL.15 ランチ PART 2
VOL.16 江戸四宿
VOL.17 千住の肖像
VOL.18 千住を往く 常東編PART1
VOL.19 千住の仕掛人
VOL.20 おばけ煙突

■おばけ煙突建設中の写真掲載のエピソード■

■1■07年の「タカラ湯」さんの年賀状はおばけ煙突建設中の写真だったと、メンバーからの情報で早速取材に。この珍しい写真の持ち主は、大川町在住の石塚貞子さん。大正14年生まれながら、眼鏡なしで小さな文字もすんなり読み下す、お元気な方です。千住一丁目に住んでいた昔に、鉄骨鳶の親方が近所にいて、この写真を下さったそう。近所の床屋さん、「理容ふじみ」の大野勝治さんとの会話から写真をお貸しすることに。大野さんから更に近所のお風呂屋さんの松本康一さんへお話が、という千住らしいいきさつでした。ちなみに大野さんも写真撮影は玄人裸足、松本さんは実際にプロのカメラマンです。

■2■石塚さん談によると、あれだけの大工事でも、事故といえば鉄骨鳶の親方の息子さんが指先を怪我した一件だけだったというのが、関係者の自慢だったそうです。

編集後記

■今回、特集の取材で40年ぶりに千住消防署の火の見やぐらに登り懐かしく、眺めの変化にビックリ。上空のガラス窓に映った自分の顔にもビックリ。（柳下）■「日本料理、何が作ってよ」イタリアの友人が言う。さて日本料理って何だろう？モツ煮込み、食べたいな。（よねつせいたろう）■「いぬのえいが」で鼻水すすり、「三丁目の夕日」で号泣しました。最近、徳光和夫（古くは桂小金治）症候群です。（05ひろせ）藝大がやって来た。バイオリンを小脇に抱えた素敵なバイリンギャル（バイリンガルではなく）が、千住を闊歩する光景を勝手に描いたのは私だけ？（06ひろせ）■銭湯のりんご湯がとっても楽しみ。でもほとんどが網に入っている理由とは・・・みなさん、湯船に浮かんでるりんごを食べないでくださーい。（07ひろせ）■学生の頃から少しずつ関わってきて、記念すべき第20号ホントにうれしい！バックナンバーから時の流れを感じます。（なかだえり）■おばけ煙突の存在感すごかったんだろうな。本物見てみたかった！なぎらさん、お忙しい中本当にありがとうございました。（利岡）

本誌掲載記事・写真・イラスト等の無断複写（コピー）・複製・転載を禁じます。

町雑誌千住は、応援会員の皆さんのご協力、販売いただいているお店のご協力…と、町の多くの皆さまと一緒につくり上げている雑誌です。皆さまの応援参加をお待ちしています。

応援参加会員のお願い

3回配本で1会期となります。

●購読応援会員 会費3千円以上（各2冊 送料、手数料込み）
●となり組応援会員 会費6千円以上（各4冊 送料、手数料込み）
●心意気応援会員 会費1万円以上（各5冊 送料、手数料込み）
●法人会員 会費3万円以上（各10冊 送料、手数料込み）

●心意気応援会員は紙面でお名前を、法人会員は社名他をご紹介させていただきます。●

会員になっていただける方はお近くの郵便局から下記までご入金ください。入金確認次第、会員登録させていただきます。お名前、郵便番号、住所、電話番号のご記入を正確にお願いします。【郵便振替口座】00140-4-103836（町雑誌千住編集室）

会員になってくださった皆様ありがとうございます

足立区観光交流協会	石川　義夫	石原　捷恵	一　初	上木　恵子
うなぎ千寿	江口由起夫	奥乃丸伸之助	紙谷　衛	喫茶　蔵
鯨岡　亘	久保田生花店	金蔵寺	日本茶カフェ 茶翁	坂本税理士事務所
塩島　莞爾	清水　正雄	白土　徳一	新日本百年茶	スペースエイド
千住ファーマシー	千住本氷川神社	高見澤康夫	鳥　真	中島　勝正
野田　征子	波多野　純	日比谷松夫	広澤　哲也	舟橋　昇一
堀内　延浩	松田季美子	マツマル	宮田　一男	柳原ぽん太
よしだや	吉田　忠司	ラーメン70番	若林登紀子	

（敬称略、順不同）

コミック3万冊ゆったり80席
まんが喫茶
営業時間　平日AM10:00～PM11:00　日祭日AM10:00～PM10:00
TEL03-3879-7532
イト・ヨ・カ堂となり柏光社ビル4F

東武旭町歯科医院
削らないのに白い歯になれる
TEL 3888-3971
北千住駅東口
足立区千住旭町4-10

カンパをしてくださった皆様
ご協力くださった皆様
ありがとうございました

写真提供　国土地理院　東京電力
足立区　大越貞子　大野勝治
塙　久　藤見啓二　松本康一
（敬称略、順不同）

人が好きです……この街が好きです
不動産のことなら
YAMAZAKI HOUSING なんでもご相談ください
(有)山﨑ハウジング
足立区千住1-18-4
TEL 3882-2324（代）
http://www.yamazaki-h.co.jp

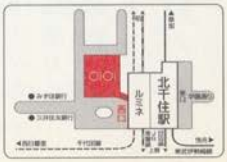
文具トラヤ
オフィス用品・OA機器・デザイン用品
千住旭町40-27
TEL〈03〉3888-5526
E-mail:toraya@adachi.ne.jp

♪次号VOL.21♪
特集は
千住の手づくり
パン屋さん
お楽しみに！
情報をお寄せください

町雑誌「千住」　VOL.20　2007年 4月発行
発行　千住・町・元気・探険隊　編集　町雑誌千住 編集人／大野順子
町雑誌千住担当　板橋陽子　岡崎一子　川上佳子　利岡健人
〒120-0044足立区千住緑町2-33-23　TEL 03-3870-7055　FAX 03-3882-5845
千住・町・元気・探険隊HP：http://1010tankentai.fc2web.com/

OIOI 北千住マルイ

〒120-8501　足立区千住3-92　☎03(5244)0101

営業時間　午前11:00 ▶ 午後8:30

(食遊館　午前10:30 ▶ 午後8:30　レストラン街　午前11:00 ▶ 午後11:00)